

96歳のチェリスト より深みへ

青木十良 この6年を映画化

96歳のチェリスト、青木十良じゅうりょうのこの6年の歩みを追ったドキュメンタリー映画「自尊を弦の響きにのせて」=写真=が21～27日、東京のオーディトリウム渋谷で上映される。ねむの木学園園長の宮城まり子やバイオリニストの森悠子との軽やかな交遊を絡め、バッハの深みへと足を踏み入れてゆく孤高の姿が刻まれている。

貿易商の家に生まれ、名匠クレンゲルの弟子のもと、才能を開花させる青木。斎藤秀雄の招きで桐朋学園で教鞭をとるようになるが、技術や理屈に音楽が押し込まれることへの違和感をぬぐえず、自ら第一線を退く。

その演奏は、斎藤の一球入魂的な熱血スタイルとは対極的

に、ふわりと宙を舞い、シャンパンの泡のようにはじけ、空気に溶ける。力の抜けた弓遣いで、情熱的なスペインの音楽から内省的なバッハやベートーベンまで、自在に呼吸する。

笑顔こそ愛嬌あいきょうたっぷりだが、言葉には威厳おごりがあり、クラシックを商品として軽く扱う現代社会への批判精神に満ちている。

「品格のない音楽は最低だ」と青木は繰り返す。バッハの曲の一節をキリストの処刑の場面に重ね、語る場面は圧巻。合奏指導の際も、音楽全体が丸みを帯びてまとまり、ひとつの流れが生まれるまで言葉を尽くす。

バッハの無伴奏チェロ組曲全6曲にがっぷり向き合うようになったのは、80歳を過ぎてか



ら。うつ病に伴う不眠に悩まされても、バッハという山脈への歩みはやめない。6番、5番とさかのぼり、予定より1年遅く4番の録音が完成する。最後の録音に向かう後ろ姿は、孤高のアスリートのようにも、音楽の懐に無心に遊ぶ幼子のようにも映る。

93分。監督・撮影は藤原道夫。連日午前11時から。各地で公開予定。問い合わせは03・5790・7022(メディア・ワン)。

(吉田純子)

芸能

97歳青木十良 自尊の響き追う



青木は1915年生まれ。専門教育をほとんど受けずチェリストとなり、80代からバッハの無伴奏チェロ組曲に取り組み始めた。「シャパンの泡がはじけるように、さわやかな音が空間にふわっと広がる。」

今月12日に満97歳の誕生日を迎えたチェリスト青木十良。その90代の日々を追ったドキュメンタリー映画「自尊を弦の響きにのせて」(藤原道夫監督)が28日〜8月10日、大阪・第七芸術劇場で上映される。

チェリストの日常、映画化

「、そんな境地を90代にしてなお目指す青木の日々を、映画は追っている。」

かつてオーケストラ奏者と歌手として出会った宮城まり子・ねむの木学園園長との60年ぶりの再会や、森悠子率いる長岡京室内アンサンブルとの共演、大阪出身の若手チェリスト堀江牧生の演奏に耳を傾ける場面が登場する。体調不良を乗り越え、2009年に無伴奏組曲第4番をCD用に録音するまでを描く。

タイトルに冠した「自尊」とは、「チェロを通じ、人間の尊厳を表現したい」と語る青木が好んで使う言葉だ。音楽に求め続けてきた「エレガンス」の根底にある感覚という。穏やかな語り口に、人生を貫く強い思いがのぞく。
(佐藤千晴)